

魯迅翻訳の「蘇俄的文芸政策」に関する ノート（上）

中 井 政 喜

- I. はじめに
- II. ソビエト連邦の文学諸潮流の概略（1917-1929）
- III. 「蘇俄的文芸政策」をめぐって
 - 一、魯迅における翻訳の直接的動因
 - 二、「蘇俄的文芸政策」の内容について（以上今号）
- IV. 魯迅の翻訳における「蘇俄的文芸政策」の意味（以下次号予定）
- V. さいごに

I. はじめに

魯迅は、『露国共産党の文芸政策』（蔵原惟人・外村史郎訳、南宋書院、1927・11、入手年月日は、1928・2・27）を底本にし、「蘇俄的文芸政策」として翻訳した。

魯迅によるこの翻訳「蘇俄的文芸政策」ははじめ、『奔流』第1巻第1期（1928・6・20）から第1巻第5期（1928・10・30）に「序言」（蔵原惟人、1927・10）、「關於対文芸的党的政策 關於文芸政策的評議会的議事速記録（1924年5月9日）」が掲載され、同誌第1巻第7期（1928・12・30）に「觀念形態戦線 and 文芸 第一回無産階級作家全聯邦大会的決議（1925年1月）」が、同誌第1巻第10期（1929・4・20）に「關於文芸領域上的党的政策 俄国××党中央委員会的決議（1925年7月1日、“Pravda”所載）」が掲載される。また、同誌第2巻第1期（1929・5・20）と同誌第2巻第5期

(1929・12・20)に「蘇俄的文芸政策附録」として「蘇維埃国家与芸術 A. Lunacharski作——“芸術与革命”(1924年莫斯科発行)所載」が掲載された¹。

そしてのちに『文芸政策』(水沫書店、1930・6)として出版された²。

この小論は、魯迅翻訳の「蘇俄的文芸政策」を取りあげ、①その内容を検討し、②魯迅によるそのほかのマルクス主義文芸理論文献の翻訳と比較して、「蘇俄的文芸政策」翻訳の意図がどこにあるのか、を推測することに目的をおく³。

上の課題を考えると、私は魯迅によるマルクス主義文芸理論の翻訳と、魯迅におけるその受容とを区別して検討することを心がける。

Ⅱ. ソビエト連邦の文学諸潮流の概略 (1917-1929)

この章では、1917年から1929年頃にかけての、ソビエト連邦⁴の文学諸潮流を概観する。それは、現在の時点からふりかえる概観であり、必ずしも1928年頃当時、魯迅が理解していた概観ではない。しかし、魯迅の翻訳「蘇俄的文芸政策」に対する私の理解には不可欠であり、また魯迅が当時理解していた概観を推測する一助となると思われる。そのため上の条件に留意しながら、ここに記すことにする⁵。

1917年ロシア十月革命以降に、プロレタリア文学が興ってきた。1917年から1929年頃までのロシア文学は三期に分けられる。

第一期は、1917年から1921年の新経済政策(ネップ)までの「戦時共産主義」の時期である。プロレタリア文学はプロレトクリト(1917年に結成された文化団体、「プロレタリア文化」の略)の運動の一部として生まれた。プロレトクリトはボクダーノフの理念に基づき、1918年、文化分野において労働者階級の支配的地位を確保するために組織された。1920年、この文学運動は有力な理論家を失ったこと等が原因となり、プロレタリア文学運動の中心はプロレタリア作家団体「クジニツァ〔鍛冶場——中井注〕」(1920年創立)に移っていった。「クジニツァ」のプロレタリア文学の特色

は、熱情・興奮を絶叫的に歌ったところにあった。

第二期は、1922年から1925年までの時期で、1921年の新経済政策(ネップ)の影響が大きかった。新経済政策によって窮乏から立ち直ったソ連社会に、大冊の雑誌『印刷と革命』(ルナチャルスキー編)、『赤い処女地』(ヴォロンスキー編)が発行された。社会の現実を把握する作品、自己の現実を認識するリアリズムの文学が主流となる。「同伴者」作家(革命を自己流に受け入れた旧知識人系の作家、すなわちロシア十月革命に反対しない、小資産階級・資産階級の作家、ピリニャーク等)⁶は自らが体験した国内戦の現実を描き、読者に歓迎された。『赤い処女地』は同伴者作家にも誌面を提供し、彼らの文学が文壇に圧倒的勢力を占めた。

これに対抗して、プロレタリア文学運動は、「クジニツア」に飽きたらない若い人々が、1922年「十月」を組織し、1923年3月「十月」の綱領を定め(その論旨はプロレトクリトの理論を受けついでいた)、1923年6月から『ナ・ポストウ〔哨所に立って——中井注〕』を発行した。『ナ・ポストウ』(ロードフ、レーヴィッチ、ワルジン、アヴェルバッハ等の成員)は「クジニツア」を非難し、同伴者作家や「レフ」(「芸術左翼戦線」)に激しい攻撃を加えた。そしてこうした文芸とその諸団体の克服をロシア共産党⁷が政策によって政治的に行うことを求めた(この点はプロレトクリトの理論と相反していた)。

「レフ」は、未来派が新経済政策に応じた変形であり、1923年「レフ」を結成し、『レフ〔芸術左翼戦線——中井注〕』を発刊した。

『ナ・ポストウ』派の論戦は激しかった。また、散文(小説)の分野でも人材を出した。セラフィモヴィッチの『鉄の流れ』(1924年)、リベジンスキーの『一週間』(1922年)、グラトコフの『セメント』(1925年)、ファジェーエフの『壊滅』(1927年)等々が注目された。

『ナ・ポストウ』派の攻撃に対して、旧来の文学、同伴者作家の文学の社会的意義を力説したのは、トロツキーとヴォロンスキーである。彼らはプロレタリアの生む文学に対して一方で援助・同情を行いながら⁸、当時

のソ連の社会・文化の状況下における、旧来の文学、同伴者作家の文学の社会的意義を高く評価した。この両派（『ナ・ポストウ』派とヴォロンスキーを支持する側）の熾烈な論争のため、1924年5月9日「ロシア共産党の文芸政策討議会」が開かれた⁹。ここには三つの異なった立場があった。第一は、トロツキー、ヴォロンスキーの立場で、旧来の文学、同伴者作家、「レフ」の文学を擁護し、『ナ・ポストウ』派がロシア共産党の政策によって同伴者作家等を圧倒しようとする主張に反対した。第二は、『ナ・ポストウ』派の立場で、プロレタリア文学の主導的地位の獲得を主張した。その場合ロシア共産党が政策として直接干渉することを求めた。第三は、ブハーリン、ルナチャルスキー等の立場で、プロレタリア文学が自らの力で主導的地位を獲得することを支持した。そして同時に文芸諸団体の共存と自由な競争を認め、ロシア共産党が政策として直接干渉することに反対した。

1925年1月に、『ナ・ポストウ』派の活動により、プロレタリア文学運動の陣容が整い、第一回全連邦プロレタリア作家大会において、『ナ・ポストウ』派のワルジンが報告する「イデオロギー戦線と文学」（「観念形態戦線と文芸」として「蘇俄的文芸政策」に所載）が決議として採択された。しかし1925年7月1日に発表されたロシア共産党中央委員会の決議「文芸の領域における党の政策について」（「关于文芸領域上的党的政策」として「蘇俄的文芸政策」に所載）は、ロシア共産党が政策的に直接干渉することを否定し、文芸諸団体の共存と競争、創作における自由を肯定した。それと同時に、プロレタリア文学が自らの力で主導権を獲得することを支持していた。

1925年7月のこの文芸政策の決議は論争に一段落を与え、1928年から『ナ・ポストウ』派のラップ（ロシア・プロレタリア作家協会の略称、1925年1月創立）¹⁰が猛威をふるうようになるまで、文芸政策の基本線となった。

第三期（1926年以降）には、ロシア共産党のこの文芸政策の決議がプロ

レタリア文学運動を新しい方向に導いた。1926年3月に『文学の哨所に立つて』（アヴェルバッハ、リベジンスキー等編）が発刊された。創作方面に重点を移して、プロレタリアの文化的独立を実現しようとした。プロレタリア文学運動の陣営には優れた作家が集まり、主導権を獲得するに足る実力をもつようになった。同伴者作家の文学も、プロレタリア社会の中で十年を経過して、プロレタリア・イデオロギーと融和しはじめた。この傾向がプロレタリア文学とそのほかの文学を接近させた。

しかし『ナ・ポストウ』派のラップは1928年12月以降、ロシア共産党中央委員会の布告のもとに文壇における指導的地位を獲得し、教条的強圧的に指導して猛威をふるうようになる¹¹。

1932年4月、ロシア共産党中央委員会はラップを初めとするあらゆる文学団体を解散させ、それにかわりロシア共産党の統制の下に、単一のソビエト作家同盟を結成することを決めた¹²。以後、ロシア共産党は文学の諸問題に直接的な関与をすることになる。

Ⅲ. 「蘇俄的文芸政策」をめぐって

一、魯迅における翻訳の直接的動因

1928年1月から中国において、革命文学論争が始まった。魯迅に対する中国の革命文学派の激しい批判が、「蘇俄的文芸政策」翻訳（1928年6月から『奔流』に掲載）の直接的動因となった、と私は推測する。

1915年に発刊した雑誌『新青年』は、中国の伝統的旧文化・旧文学に対して「科学」と「民主主義」を標榜して批判し、1917年頃から文学革命を推し進めてきた。その中で、魯迅・周作人・胡適・陳独秀等は伝統的儒教に基づく旧社会の倫理・文化等に対して、厳しく批判を行い、新文化・新文学の建設を推進してきた。その後成立した文学団体である、文学研究会（1921年1月成立、周作人、沈雁冰〈茅盾〉、鄭振鐸等）、創造社（1921年6月成立、郭沫若、成仿吾等）等は新文学の建設のために努力してきた。

しかし1927年、国民革命が挫折することによって、1928年創造社（第三

期創造社)、太陽社は中国変革を労働者階級に依拠する方向に転換し、無産階級文学(プロレタリア文学)を唱導する。そのとき創造社・太陽社等は批判の矛先を、伝統的旧文化・旧文学に対してではなく、新文学を推進してきた魯迅・周作人・茅盾等に集中する。創造社等は、魯迅等の文学を小資産階級の文学として全面否定を行い、また人道主義と人道主義者(トルストイをはじめ、中国の人道主義者)を全面批判して、そのうえで無産階級文学を唱導した。

魯迅は、1927年中山大学に赴任した当時、「革命の策源地」広州ですら中国旧社会の意識が改革されていない、上からの革命がなされたにすぎない商人と軍人の町であると考えていた¹³。茅盾は、「從牯嶺到東京」(1928・7・16、『小説月報』第19巻第10号、1928・10・10)で中国変革の過程において小資産階級を切り捨てることはできないとし、また文学分野においても小資産階級を読者として獲得することの重要性を述べた。

魯迅・周作人・茅盾等に対する創造社・太陽社等の革命文学派による激しい批判は、結果として魯迅がマルクス主義文芸理論と本格的に接触し、受容するための動力となった¹⁴。

革命文学論争の争点は大略次のように言える¹⁵。

①無産階級文学の担い手について(無産階級文学の成立を認めたくえで)、創造社は無産階級自らが無産階級文学を必ずしも作りだすものではなく、作者が無産階級としての意識を獲得しているかどうかにかかる、とした¹⁶。

それに対して、甘人はほかの階級の人が第四階級(労働者階級)の文学を書くのは虚偽だとし、また創造社が「芸術のための芸術」の主張から突然一転して、無産階級文学を唱えることについて不信を表明した¹⁷。魯迅は、1926、27年頃、無産階級自身が書いた作品が無産階級文学であるとしていた¹⁸。それゆえ無産階級ではない魯迅自らは、自分の出自である階級を批判・攻撃することを選び、そのことをつうじて中国変革を補佐しようとした。

②文学における階級性の問題について、創造社は文学には階級や利害関係があるとし、「社会の階級制度がアウフヘーベン〔止揚——中井注〕されない前にあっては、いかなる文学であれ、それは支配階級の意識形態を反映した文学である。」¹⁹とした。さらに、創造社は階級的観点からのみ、文学の価値を評価した(「階級還元論」)。ゆえに小資産階級文学として、魯迅等の文学を全面否定した。

それに対して、侍桁は、「芸術家自身はあらゆる束縛を受けてはならず、芸術に対する良心のみが彼を支配するすべてである。」²⁰とした。また、甘人は、「文学は人生の総括としての反映であり、個人を借りて表現されるものである。その本質は本来個人を超えるものであって、それゆえ利害のないものであり、階級の無いものである。」²¹とした。魯迅は、1927年以前、文芸が自己(個性、内部要求)に基づく自立的なものと考えていた。すなわち文芸は封建的な規範・倫理、その圧力から自立的なものと考えた。魯迅の社会観においては、中国旧社会における金持ち階層の支配を認識していたが、しかしその社会構造に、虐げる者と虐げられる者の連鎖の構造を考えた。また、魯迅は国民革命期という過渡的時期の知識人階層として自己の生き方を模索し、国民革命に期待を寄せた。しかし当時、魯迅の中国変革の展望は具体性を欠いていた。

③文学と宣伝の問題について、創造社は文学が宣伝の武器であるとした²²。

それに対して、甘人は、「文芸は完全に真情の流露でなければならない。いったん使命をもてば、それは偽りのものである。」²³とした。魯迅は1927年28年初め頃、文芸は自己(個性、内部要求)に基づくとし、それゆえあらかじめ目的をもった文芸は偽りであるとした。すなわち文芸と宣伝は二律背反の関係にあるとした。ゆえに「革命人」であってこそ(魯迅自らは「革命人」ではないとしつつ)、「革命文学」を書くことができるとした。

④無産階級文学の描く対象、題材の問題について、創造社はそれに制限を加えないことを声明した。しかし目下の状況から要請される文学の内容

を重視し、結局題材を問題とした。

⑤旧来の文学との継承関係について、創造社は、「史的唯物論」の立場に立ち、1928年頃当時の時代の経済的基礎と社会状況の分析に基づいて、上部構造としての文学において無産階級文学の出現を要請した²⁴（状況規定論）。その場合、革命文学派は魯迅、周作人、茅盾等のこれまでの新文学を、小資産階級作家の書く小資産階級文学として全面否定し（「階級還元論」）、旧来の文学との継承関係を断ち切った。すなわち革命文学派は、無産階級革命の実行が要請されるとする新しい状況下で、旧来の文学との継承関係を断ち切り、その新しい状況の要請に基づく、新しい状況に適合する文学（無産階級文学）を主張した。

魯迅は1928年以前、或る程度において、旧来の文学（五四期以来の新文学）の有効性と、新旧文学の継承・発展の関係を認識していたと思われる²⁵。また魯迅は、創造社がこれまでの自らの、小資産階級の文学・「自我の表現」の重視（芸術のための芸術の色合いもあった）の主張を投げず、突然の転換をしたことに不信をもった。

上の諸論点に関連して魯迅は、1928年から始まる革命文学論争を契機として本格的に、マルクス主義文芸理論と接触し、その後そのさまざまな領域を学び、そのさまざまな領域の理論を受容していったと言える。

では、1928年6月から『奔流』に翻訳掲載されはじめた「蘇俄的文芸政策」では、どのようなことが論じられ、また魯迅はそこからどのような領域の理論を学んだのだろうか。

二、「蘇俄的文芸政策」の内容について

1. 「蘇俄的文芸政策」の特徴

1924年5月9日に開催された「ロシア共産党の文芸政策討議会」の速記録によれば、この「文芸政策討議会」はヤコフ・ヤコヴレフ（エブシュテイン）が司会を務めた。議論は鋭い対立を見せながらも、しかしきわめて自由闊達で率直な討論が行われている。そうした討議のありさまから、当

時のロシア共産党の党内で、或いはその周囲で民主主義が保障されていたことがうかがわれる。

「訳者序」(蔵原惟人、1927・10)は次のように言う。

「我々はそこに、プロレタリア文芸そのもの及びこれに対する党の政策に関して凡そ三つの異った立場を発見する——

一、ウオロンスキイ及びトロツキイによって代表される立場。

二、ワルヂンその他『ナポストウ』一派の立場。

三、プハーリン、ルナチャルスキイ等の立場。」(「訳者序」)²⁶

この分け方に基づいて、論争の内容を紹介する。

①ヴォロンスキーは、当時のソ連社会の文化・文学の状況に基づいて、次のように主張する。a.或る一つの文学団体の主張を党の方針とすることはできない。b.労働者農民の中から文学者を育成し、プロレタリア文学を成長させるために、旧来の文学の遺産、同伴者作家の文学から批判的に撰取すること、それを批判的に継承し発展させることの重要性を強調する。こうした方針が、文芸の領域におけるこれまでのロシア共産党の方針であったことを言う。

ヴォロンスキーやトロツキーは、文学という特殊な分野において、作家の内面的自由、創造の自由を尊重することの重要性を強調した。ヴォロンスキーは同伴者作家等をプロレタリア文学の周囲に引きつけ、そのことをつうじて、文学界全体の水準の向上とプロレタリア文学の育成・支援をはかろうとした。ヴォロンスキーは、それが現状において順調に進んでいることを述べた。

②これに対して、『ナ・ポストウ』派は1917年から1924年のソ連社会の状況変化をとりあげ、とりわけ新経済政策(1921年)以降の資本主義的傾向の復活に危機感をもっていた。彼らは、1924年当時、同伴者作家が隆盛する文学界の現状を非難し、この現状を導いたものがヴォロンスキーの文芸指導方針と『赤い処女地』の編集方針であるとし、これを政治的立場から批判した。『ナ・ポストウ』派はヴォロンスキーの方針がブルジョアとい

う敵を利するもの、ブルジョア・イデオロギーの蔓延を助長するものであり、ヴォロンスキーに対する集中的批判を行った。また同時にトロツキーを批判した²⁷。

『ナ・ポストウ』派は他方で、旧文学のあらゆる価値のあるものを利用し、利益をもたらさうな文学者（同伴者作家を含めて）を引きつけなければならぬとした。しかし例えば同伴者作家で利用するのは、「真実なる革命の同伴者」（「ワルジンの報告」）でなければならぬとする厳しい限定をつけ、それは「レフ」や農民作家との提携であるとする（「I.ワルジンの結語」）。

『ナ・ポストウ』派は、労働者農民によるプロレタリア文学（無産階級文学）の育成と普及について、ロシア共産党が政策的に関与して支援することが必要であり、文芸の領域における党の執権を求めた。そのために党自身の団体、すなわち『ナ・ポストウ』派の組織である「ワップ〈全ロシア・プロレタリア作家協会〉」に依拠する必要性を主張した²⁸。

③ルナチャルスキーは、『ナ・ポストウ』派が政治的観点からのみ文芸に近づき、文芸の特殊性を無視していることを指摘する。天分のある作品は、経験の特殊な組織であり、たとえそれに政治的に好ましくない傾向が幾分かあるとしても、それはこの国にとって有益であるとする。小ブルジョアの国（ソ連）を我々とともに進めるには、同情と寛容によって小ブルジョアを戦術的に獲得する必要がある。

他方、ルナチャルスキーはまた、プロレタリア文化についてのトロツキーの考え方（過渡期におけるプロレタリア文化・芸術の不成立論）を批判する。我々は過渡時期において、プロレタリア国家を建設し、そこではソビエト組織も、労働組合もプロレタリア文化の一部分であり、過渡的芸術としてのプロレタリア芸術が存在するとする。

このことからルナチャルスキーは、我々がプロレタリア文学を支持すると同時に、同伴者作家を決して排斥してはならぬとする。我々の周りに小ブルジョア文学を組織しなければならないとする²⁹。

2. 1925年7月発表のロシア共産党中央委員会の決議について

この論争は、「文芸の領域における党の政策について——ロシア共産党中央委員会の決議——」（1925・6・18、『プラウダ』『イズヴェスチヤ』、1925・7・1）によって、基本的に収束した³⁰。この決議は1925年7月から、ソ連における文芸に関する指導原理となり、1928年末頃まで効力を発揮したと思われる。

このロシア共産党中央委員会の決議における関連する内容は、次のようなものである。

①1925年当時、ソ連は労働者階級が執権する過渡時期にある。

②ロシア共産党はプロレタリア作家、プロレタリア農民作家を支持し、同伴者作家を援助する。そのうえで、文芸領域上の問題・傾向について、ロシア共産党はその直接の政策的行政的干渉を認めず、文芸諸団体の自由な競争と議論に任せる。（第13項、第14項）

③プロレタリア文学が自らの力で主導的地位をもつようになることを支持する。（第9項）

④農民作家をプロレタリア・イデオロギーの軌道に導き入れて育成することを重視する。また同伴者作家に対して同志的協同の過程の中で、彼らのプロレタリア・イデオロギーへの揚棄（止揚）を支援し、寛容に接する。（第10項）

⑤プロレタリア作家は、旧文化遺産および言葉の専門家である同伴者作家に対する批判的摂取を重視しなければならない、同時に思想的な主導的地位を獲得するための闘争を行わなければならない。（第11項）

上述の内容から見て、ロシア共産党中央委員会の決議は、文学に対するロシア共産党の直接の行政的政策的介入を認めず、そのうえで文芸諸団体・諸潮流のさまざまな意見が共存し、自由な競争をすることを承認した。また決議は同伴者作家、農民作家に対して同志的に協同して、寛容に接しなければならないとし、そしてプロレタリア文学が自らの力によって主導的地位を獲得することを支持した、と言える。

*1: この小論を書くにあたって参照した雑誌『奔流』は、『奔流』（影印本、全6冊、出版者不明）である。また、「雑誌『奔流』（魯迅・郁達夫編集、第1巻1期～第2巻5期、1928年6月～1929年12月）目録補（拙稿、『大分大学経済論集』第36巻第4号、1985・1）を参照した。

*2: 『奔流』に掲載された「蘇俄的文芸政策」と『文芸政策』（水沫書店、1930・6）との内容の異動は次の点にある。『文芸政策』（前掲、1930・6）には、「蘇俄的文芸政策附録」の「蘇維埃国家与芸術」が掲載されず、それに代わる附録として「以理論为中心的俄国無産階級文学発達史」（岡沢秀虎著、馮雪峰訳、「理論を中心とするロシア・プロレタリア文学発達史」、『プロレタリア芸術教程』第2輯〈世界社、1929・11・21〉所収）、「后記」（1930・4・12）が掲載された。

小論では、「蘇俄的文芸政策」に主として言及する。「蘇俄的文芸政策」の範囲は、『奔流』誌上の「蘇俄的文芸政策附録」を除いた部分とする。また必要に応じて、『文芸政策』（水沫書店、1930・6）に言及する。なお、私の使用した「蘇俄的文芸政策」の底本は、前述の『奔流』（影印本、全6冊、出版者不明）であり、また『魯迅訳文全集』第5巻（北京魯迅博物館編、福建教育出版社、2008・3）を参照した。

*3: 私が目をとおした小論の主題に関する論文等、参考とした文献等は次のものにとどまる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

[中国語参考文献]

- ①「魯迅筆下的托洛斯基只是文評家」（王觀泉、『魯迅研究』1984年第3期、1984）
- ②「馬克思主義美学和蘇聯文学」（李欧梵、『鉄屋中的呐喊——魯迅研究』、三聯書店（香港）、1991・3）
- ③「蘇俄文芸論戦与中国“革命文学”」（艾晓明、『中国左翼文学思潮探源』、湖南文芸出版社、1991・7）
- ④「創造社前后期転変与日本福本主義」（艾晓明、『中国左翼文学思潮探源』、湖南文芸出版社、1991・7）
- ⑤「魯迅对馬克思主義批評傳統的選択」（艾晓明、『中国左翼文学思潮探源』、湖南文芸出版社、1991・7）
- ⑥「蘇共文芸政策、理論的詠介及其对中国左翼文学運動的影響」（李今、『中国現代文学研究叢刊』2002年第1期）
- ⑦「蘇共文芸政策和理論的翻譯」（李今、『三四十年代蘇俄漢訳文学論』、人民文

学出版社、2006・6)

- ⑧「魯迅后期的翻訳」(顧鈞、『魯迅翻訳研究』、福建教育出版社、2009・4)
〔日本語参考文献〕
- ①「魯迅を語る——北支那の白話文学運動——」(山上正義、『新潮』第25巻第3号、1928・3)
- ②「銭杏邨における〈新写实主義〉」(芦田肇、『東洋文化』第52号、1972・3)
- ③「革命文学論争と太陽社」(佐治俊彦、『東洋文化』第52号、1972・3)
- ④『資料世界プロレタリア文学運動』第1巻(栗原幸夫等編、三一書房、1972・9・30)
- ⑤『資料世界プロレタリア文学運動』第2巻(栗原幸夫等編、三一書房、1973・1・31)
- ⑥「解説」(『芸術表現の自由と革命』、ルナチャールスキー著、藤井一行編訳、大月書店、1975・5・28)
- ⑦「李初梨における福本イズムの影響」(齋藤敏康、『野草』第17号、1975・6・1)
- ⑧『ロシア・ソヴェト文学史』(昇曙夢、恒文社、1976・2・20)
- ⑨「社会主義における知的自由の問題——初期ソヴェト政権の文化政策の理論と実際」(藤井一行、『社会主義と自由』、青木書店、1976・2・1)
- ⑩「“党派性”と知的自由」(藤井一行、『社会主義と自由』、青木書店、1976・2・1)
- ⑪『ロシア革命』、E.H.カー著、塩川伸明訳、岩波書店、1979・3・22)
- ⑫「ヴォロンスキーと『赤い処女地』——生誕百周年によせて——」(藤井一行、『富山大学人文学部紀要』第9号、1985・2・28)
- ⑬「馮雪峰における『同伴者』論の受容と形成——その《革命与知識階級》——」(芦田肇、『東洋文化研究所紀要』第98冊、1985・10・15)
- ⑭『ロシア文学史』(川端香男里編、東京大学出版会、1986・3・25)
- ⑮「魯迅、馮雪峰のマルクス主義文芸論受容(1)——水沫版・光華版『科学的芸術論叢書』の書誌的考察——」(芦田肇、『魯迅研究の現在』、汲古書院、1992・9)
- ⑯『ロシア・ソ連を知る事典』(平凡社、1994・4・25、増補版)
- ⑰『集英社 世界文学大事典』第5巻(集英社、1997・10・25)
- ⑱『ロシア革命史』全5冊(トロツキー著、藤井一行訳、岩波書店、2000-2001)
- ⑲『わが生涯』上下(トロツキー著、森田成也訳、2000-2001、岩波書店)

⑳『魯迅とトロツキー』（長堀祐造、平凡社、2011・9・25）

*4：1917年、十月社会主義革命によりソビエト政府が発足し、1922年、ソビエト社会主義共和国連邦が成立する。1917年以降の時期を含めて、小論では便宜上、ソビエト連邦或いはソ連と称する。

*5：「理論を中心とするロシア・プロレタリア文学発達史」（岡沢秀虎著、『プロレタリア芸術教程』第2輯〈世界社、1929・11・21〉所収、「以理論为中心的俄国無産階級文学発達史」〈馮雪峰訳、『文芸政策』、水沫書店、1930・6所収）に主として依拠する。これは、『文芸政策』（水沫書店、1930・6）に収められ、年月も近いことによる。

「『文芸政策』后記」（1930・4・20、『訳文序跋集』〈『魯迅全集』第10巻、1981〉）で魯迅は次のように言う

「これを初稿と比較すると、欠点が少なくなったと信ずる。第一に、雪峰は編集校訂するとき、原訳本と対照し、いくつかの間違いを訂正してくれた。第二に、彼はまた、翻訳した岡沢秀虎の『理論を中心とするロシア・プロレタリア文学発達史』を巻末につけ、いくつかの字句を私の訳例に従って改め、総覧したあとに、『文芸政策』の来源と今後の道筋をよりはっきりと理解できるようにさせた。」

*6：トロツキーは、『L.Trotsky（託羅茲基）』（『奔流』第1巻第3期、1928・8・20、底本は『露国共産党の文芸政策』（南宋書院、1927・11・25、前掲）で次のように発言する。

「我々が文学上乃至また政治上、〈ポポトチツク〔『同伴者』のこと、南宋書院本では『随伴者』と訳す——中井注〕と呼んでいるのは、我々が諸君と共に遙かに先へと歩んでいるその同じ道を、ある地点まで、跋を曳きよろよろしながらも、歩いて来る者を指すのである。」

私が使用する日本語の底本から引用する場合、仮名遣いは現代仮名遣いに、旧字体は新字体に、それぞれ改め、送り仮名はそのままとし、ルビ・傍点は省略する。以下同じ。

*7：1918年、「ロシア社会民主労働党（ボリシェビキ）」は「ロシア共産党（ボリシェビキ）」に党名を変え、1925年、「全連邦共産党（ボリシェビキ）」に変更し、1952年、「ソビエト連邦共産党」に変更した。小論では便宜上、「ロシア共産党」の呼称を使用する。

*8：「ヴォロンスキーと『赤い処女地』——生誕百周年によせて——」（藤井一行、『富山大学人文学部紀要』第9号、1985・2・28）によれば、トロツキーは過渡期におけるプロレタリア文化の建設の可能性を、その時間的關係において否定

した。しかし、過渡期における階級的文学の必要性を否定したわけではなかった。

また、ヴォロンスキーは、トロツキーのプロレタリア文化不成立の意見に賛成であったが、しかしそのプロレタリア文化の「文化」の概念は広大な内容であった。また、ヴォロンスキーも、過渡期における労働者作家や党員作家が成長し芸術的寄与を行うことについて、トロツキーと同様に重視していた。ヴォロンスキーは「ア・ウオロンスキーの報告演説」(「A.Voronsky (瓦浪斯基) 的報告演説」、『奔流』第1巻第1期、1928・6・20、底本は『露国共産党の文芸政策』(南書院、1927・11・25、前掲)で次のように言う。

「次にプロレタリア作家に就いて。私は、我国に於いては、労働者農民の最下層から、労働者及びその他種々なる組織の中から、大位から、赤軍から、新しい作家の出て来ることを、固く信ずるものである。何処かの僻地から、田舎から、作家が出て来る、——この作家こそはその血とその生活とによって、労働者及び農民と——尤も今の所はより多く農民とであるが——結びつけられているのだ。これ等の作家が必ず主要なる地置を占めるであろうと云うこと、我々が彼等に依拠し彼等を援助しなければならないと云うこと、——このことに於いては我々とプロレタリア作家との間には如何なる意見の相違もあり得ない。」(14頁)

*9:「蘇俄的文芸政策」(『奔流』第1巻第1期、1928・6・20)では「関于文芸政策的評議会」とする。以下、「文芸政策討議会」と表記する。

*10:『集英社 世界文学大事典』第5巻(集英社、1997・10・25)のラップの項によれば次のようである。

「1920年代後半のソ連の文学団体。正式名称はロシア・プロレタリア作家協会(中略)。前身となる全ロシア・プロレタリア作家協会(ワップ〈中略〉)は1920年の第1回全ロシア・プロレタリア作家大会において組織された。(中略)1928年、ワップを含めた全国のプロレタリア作家協会がヴォアップ(中略)(全ソ・プロレタリア作家協会)に統合されると、その指導部がラップとなり、ワップの活動を引き継いだ。(中略)党が文学統制を強めるようになるとラップはザミヤチン、ピリニャーク等の同伴者作家だけではなく、マヤコフスキーやゴリキーらの非プロレタリア系作家、そして〈ペレワール〉の作家達を攻撃した。(中略)32年には党中央委員会決議により解散させられた。」

*11:『ロシア文学史』(川端香男里編、東京大学出版会、1986・3・25、310頁-311頁、ルビを省略する)は次のように指摘する。

「1920年代の特徴が、複数の流派や主義の共存・競合の中で自由な文学的実験を

許容する雰囲気だったとすれば、1930年代とは、スターリンの独裁政権の確立にともなって、創作の自由が圧殺されてゆく過程であったと言える。こういった転換の背景としては、ネップ（新経済政策）に代わって第一次五カ年計画が始まり（1928）、ソ連の工業化が精力的に押し進められるとともに、農村の強制的な集団化や、いわゆる富農の撲滅が開始される、などという歴史の流れが挙げられよう。〈上からの〉イデオロギー的な統制が厳しくなってゆくソヴィエト社会にあって、文学はこのような歴史の流れから自由であることを許されないどころか、そこに積極的に参加することを強制されるようになるのである。」（310頁）

「創作の自由や複数意見の共存を圧迫する傾向は、すでに1920年代末に強まっていた。1925年に結成された文学団体〈RAPP〉（ロシア・プロレタリア作家連盟）は、1928年以降文壇で猛威をふるうようになり、文学におけるプロレタリア階級の代表者として、非プロレタリア作家やいわゆる同伴者作家を激しく攻撃した。」（310頁）

「共産党の文学政策を代行すると自任するラップの過激さは、党にとっても目に余るほどのものとなり、ついに1932年4月、共産党中央委員会はラップを初めとするあらゆる文学団体を解散させ、そのかわりに単一のソヴィエト作家同盟を党の統制の下に結成することを決めた。この決定を受けて、ゴリキイを中心とする準備委員会が発足し、1934年には第一回の全ソヴィエト作家大会が開かれ、〈社会主義リアリズム〉がソヴィエト文学の基本的な方法として確認された。以後、現在に至るまで、ソヴィエト作家同盟は唯一の全国規模の公認作家団体として、一枚岩のソヴィエト文学形成のために機能してきた。」（311頁）

*12：『ロシア文学史』（川端香男里編、東京大学出版会、1986・3・25、313頁）は次のように指摘する。

「ソヴィエト作家同盟の結成は、ラップという過激派の解散を前提としたので、逆説的なことだが、一時的に文学の状況が緩和したような印象を与えた。しかし1934年12月のキーロフ暗殺事件によって幕を開けたスターリンによる〈大粛清〉は、多くのすぐれた作家たちにも次々と波及し、ソヴィエト文学はかつてない暗黒時代に突入する。」

*13：魯迅のこの点についての考え方は、「鐘楼上——夜記之二」（『語絲』第4巻第1期、1927・12・17、『三閑集』）、「通信」（1928・4・10、『三閑集』）、「魯迅を語る——北支那の白話文学運動——」（山上正義、『新潮』第25巻第3号、1928・3）に窺われる。

*14：「『三閑集』序言」（1932・4・24）で魯迅は次のように言う。

「私には創造社に感謝しなければならないことがある。それは彼らが私に幾種かの科学的文芸論を読むように『強要』、先の文学史家たちが山ほど説明して、なお混乱してすっきりしない疑問を理解するようにさせたことである。このことからさらにはブレハーノフの『芸術論』を翻訳することとなり、私の——私のためにさらに他人にまで及んだ——ただ進化論のみを信ずるという偏りを補い正してくれた。」

「魯迅先生兩次回北京」（李霽野、1956・8・25、『魯迅先生与未名社』、湖南人民出版社、1980・7）は次のように、1929年5月北京に帰省したときの魯迅の言葉を伝える。

「或るとき私たちは、すでに組織に参加したのかどうか、彼に尋ねた。彼は次のように言った。別に参加していない、だがマルクス主義は最も明快な哲学だと考える。以前混乱してはっきりさせることができなかつた多くの問題は、マルクス主義の観点から見ると、分かるようになった、と。」

*15：『近二十年中国文芸思潮論 1917-1937』（李何林編著、陝西人民出版社、1981・4）を参考とする。

*16：「評駁甘人的『拉雜一篇』」（克興、『創造月刊』第2巻第2期、1928・9・10）。

また、「怎樣地建設革命文学」（李初梨、1928・1・17、『文化批判』第2号、1928・2・15）は、階級移行を認めたくえて、その動機が問題だとした。

*17：「中国真文芸の将来与其自己的認識」（甘人、『北新』半月刊第2巻第1期、1927・11、底本は『〈革命文学〉論争資料選編』上下冊〈人民文学出版社、1981・1〉）

*18：「革命時代の文学」（1927・4・8講演、『而已集』）

*19：「評駁甘人的『拉雜一篇』」（克興、『創造月刊』第2巻第2期、1928・9・10）

*20：「評『從文学革命到革命文学』」（侍桁、1928・4・11、『語絲』週刊第4巻第19、20期、1928・5・7、14）

*21：「拉雜一篇答李初梨君」（甘人、『北新』半月刊第2巻第13期、1928・5・6、底本は『〈革命文学〉論争資料選編』上下冊〈前掲〉）

*22：「芸術家当面的任務」（谷蔭、1928・6・1、『畸形』半月刊第2号、1928・6・15）

*23：「中国真文芸の将来与其自己的認識」（甘人、『北新』半月刊第2巻第1期、1927・11、前掲）。魯迅は、それまで甘人と同じように、文学と宣伝を二律背反の関係としてとらえていたが、しかしその後、文学をひとつの社会現象と考えることにより、文学における宣伝の作用を認めるようになった。創造社はむしろ、

狭義の宣伝の解釈に陥り、文芸の特質（文芸は自己〈個性・内部要求〉に基づくという面を含めて、形象による文芸の認識的価値等）を軽視することになった。

*24：「評駁甘人的『拉雜一篇』」（克興、『創造月刊』第2巻第2期、1928・9・10）

*25：「認識生活的芸術与今代」（瓦浪司基〔ヴォロンスキー〕、『蘇俄的文芸論戦』〈任国楨訳、北京北新書局、1925・8〉でヴォロンスキーはゴーゴリの『死せる魂』を例にあげて次のように言う。

「もしも旧文芸が受動的観賞的無意識的であるものなら、その旧芸術は人に行為や奮闘を呼び起こすことはありえない。しかし、帝政の専制と奮闘し、暗黒の腐敗のロシアと奮闘することにおいて、旧芸術には人を敬服させる堂々たる偉大な功績がある。」

また、プレハーノフの見解を引用しながら次のように言う。

「プレハーノフは、新文学が旧文学に反対するのは自然のことであり、不可避なことである、と理解していた。これは事実からもそうなのである。しかし反対には限度が必要であり、決して極端ではない。慎重に境界線を引き、何を採用すべきで、何を排斥すべきか、を知らなければならない。前代の文学から新生した文学は、その必要条件（自己の将来における発達のための）を採り、新文学はその無用なしかも有害な古い遺産を排斥しなければならない。」

*26：『露国共産党の文芸政策』（蔵原惟人・外村史郎訳、南宋書院、1927・11）による。

*27：トロツキーに対する政治的批判は、1924年末に始まった。それより以前のこの時点（1924年5月9日の「ロシア共産党の文芸政策討議会」）では、その影響は顕著には現れていないと思われる。むしろトロツキーはロシア十月革命を指導した重鎮のひとりとして存在している。それは例えばトロツキーの発言の圧倒的に多い分量に見られる。これは、必ずしもトロツキーの雄弁と博学のためばかりではない、と私には思われる。（ちなみに、1924年末から政治的批判が始まり、1925年1月、軍事人民委員を解任される。1926年10月、政治局から追放される。1927年11月、党を除名される。1929年2月、トロツキーは国外追放される。）

「蘇俄的文芸政策」における各発言者および決議のページ数は以下のとおりである（『露国共産党の文芸政策』〈蔵原惟人・外村史郎訳、南宋書院、1927・11〉のページ数による）。⑬のトロツキーの発言がいかに群を抜いていたかがわかる。（なお、①から⑮の番号は中井が便宜的につけたものである。〔 〕内の表題は、『資料世界プロレタリア文学運動』第2巻〈栗原幸夫等編、三一書房、1973・1・31〉による。『露国共産党の文芸政策』の内容に該当する部分は江川卓訳。）

- ① 「ア・ウオロンスキイの報告演説」(3頁-19頁、全17頁) [A.ヴォロンスキーの報告]、『奔流』第1巻第1期、1928・6・20
- ② 「ワルジンの報告演説」(20頁-39頁、全20頁) [ワルジンの報告]、『奔流』第1巻第1期、1928・6・20
- ③ 「エス・オシンスキイ」(40頁-43頁、全4頁弱) [N.オシンスキー]、『奔流』第1巻第1期、1928・6・20
- ④ 「エフ・ラスコーリニコフ」(43頁-47頁、全5頁弱) [F.ラスコーリニコフ]、『奔流』第1巻第1期、1928・6・20
- ⑤ 「ウヤチ・ポロンスキイ」(48頁-53頁、全6頁弱) [V.ポロンスキー]、『奔流』第1巻第1期、1928・6・20
- ⑥ 「ゲ・レレーウィツチ」(53頁-57頁、全5頁弱) [G.レレーヴィチ]、『奔流』第1巻第1期、1928・6・20
- ⑦ 「エム・プハーリン」(58頁-65頁、全8頁弱) [N.プハーリン]、『奔流』第1巻第1期、1928・6・20
- ⑧ 「エル・アウエルバッツ」(65頁-69頁、全4頁弱) [L.アヴェルバッハ]、『奔流』第1巻第2期、1928・7・20
- ⑨ 「ゲ・ヤクポフスキイ」(69頁-71頁、全3頁弱) [G.ヤクポフスキー]、『奔流』第1巻第2期、1928・7・20
- ⑩ 「ヤー・ヤコヴレフ」(72頁-75頁、全4頁弱) [Y.ヤコヴレフ]、『奔流』第1巻第2期、1928・7・20
- ⑪ 「カー・ラデック」(75頁-78頁、3頁) [K.ラデック]、『奔流』第1巻第2期、1928・7・20 - 第1巻第3期、1928・8・20
- ⑫ 「ウエ・プレットニョーフ」(78頁-82頁、全5頁弱) [V.プレットニョーフ]、『奔流』第1巻第3期、1928・8・20
- ⑬ 「エル・トロツキイ」(82頁-118頁、全37頁弱) [L.トロツキー]、『奔流』第1巻第3期、1928・8・20
- ⑭ 「エス・ロードフ」(118頁-126頁、全9頁弱) [S.ロードフ]、『奔流』第1巻第3期、1928・8・20
- ⑮ 「アルナチャールスキイ」(126頁-136頁、全11頁弱) [A.ルナチャールスキー]、『奔流』第1巻第3期、1928・8・20
- ⑯ 「ア・ベズイミヨンスキイ」(136頁-139頁、全4頁弱) [A.ベズイメンスキー]、『奔流』第1巻第4期、1928・9・20
- ⑰ 「エヌ・メシチエリヤコフ」(139頁-141頁、全3頁) [N.メシチエリヤコフ]、『奔流』第1巻第4期、1928・9・20

『奔流』第1巻第4期、1928・9・20－第1巻第5期、1928・10・30

⑱「イ・ケルジエンツエフ」(142頁-145頁、全4頁弱)〔P.ケルジエンツエフ〕、
『奔流』第1巻第5期、1928・10・30

⑲「デ・リヤザノフ」(145頁-151頁、全7頁弱)〔D.リヤザノフ〕、『奔流』第1巻
第5期、1928・10・30

⑳「デミヤン・ベードヌイ」(151頁-156頁、全6頁弱)〔デミヤン・ベードヌイ〕、
『奔流』第1巻第5期、1928・10・30

㉑「イ・ワルジンの結語」(156頁-167頁、全12頁弱)〔I.ワルジンの結語〕、『奔
流』第1巻第5期、1928・10・30

㉒「ア・ウオロンスキイの結語」(168頁-174頁、全7頁弱)〔A.ヴォロンスキー
の結語〕、『奔流』第1巻第5期、1928・10・30

㉓「ヤー・ヤコヴレフの結語」(174頁-177頁、全4頁弱)〔Y.ヤコヴレフの結語〕、
『奔流』第1巻第5期、1928・10・30

㉔「イデオロギー戦線と文学」(178頁-192頁、全15頁弱)〔イデオロギー戦線と
文学〕、『奔流』第1巻第7期、1928・12・30

㉕「文芸の領域に於ける党の政策に就いて」(193頁-203頁、全11頁)〔文芸の領
域における党の政策について〕、『奔流』第1巻第10期、1929・4・20

*28：『奔流』の翻訳には、底本に基づき、第一回全連邦プロレタリア作家大会で
の「ナ・ポストウ」派のワルジンの報告に基づく決議「イデオロギー戦線と文学」
を掲載する。それは「ナ・ポストウ」派の考え方を明瞭に示すものである。

*29：『奔流』には、「蘇俄的文芸政策附録 蘇維埃国家与芸術 A. Lunacharski
作——“芸術与革命”（1924年墨斯科発行）所載」（『奔流』第2巻第1期、1929・
5・20、同第2巻第5期、1929・12・20）が、底本にはない附録として記載されて
いる。「蘇維埃国家与芸術〔ソヴェート国家と芸術〕」（A. Lunacharski、『芸術与
革命』（1924年モスクワ発行）所載〔『新芸術論』、ルナチャルスキー著、茂森唯
士訳、至上社、1925・12・18〕）は、労農文教委員長として革命的国家と芸術の
関係を広く深く論じている。ロシア共産党の文芸政策にかかわる論点の方向は、
「政策討議会」におけるルナチャルスキーの発言内容とほぼ同じで、それを確認
する内容となっている。ここにも、過渡期におけるトロツキーのプロレタリア芸
術不成立論に対する詳細な反論が行われている。

*30：「解説」（『芸術表現の自由と革命』、ルナチャルスキー著、藤井一行編訳、
大月書店、1975・5・28）は次のように指摘する。

「この中央委員会決議の作成にはルナチャルスキー自身が重要な役割を果た

している。彼は党の政治局が選任した決議作成委員会の責任者をつとめたのである（なお、決議の草案とみられるルナチャールスキーの手になる文書も残っている）。』